

会員近況



富山大学
経済学部経営学科 菊田 健作

数学科を卒業して大学院に入学した頃は、“利得関数”という言葉を知り、異和感を覚えたものですが、現在は主として経営学科の学生を対象にして、ORの講義を受けもっております。大学院時代は主に理論的な面を研究対象としてきましたが、学生相手に講義その他を受けもつことによって、多少なりともORの“やわらかい面”を身につけることができたいと思っております。現在、ゲーム理論におけるコアの存在問題に付随する問題およびある種の順序づけ問題を研究しております。性格上、新しい問題に飛びつくというタイプでありませぬので、どうしても古くて地味な問題の研究になります。

それにしましても、今度の豪雪の際の対応の仕方にはORの問題がたくさん含まれているように思われます。

(財)余暇開発センター
常務理事 長尾 成吾

高度経済成長期を経てやっと経済的には世界の先進国の仲間入りをしたわが国は今後どの方向へ進んだらよいか模索中といったところでしょう。戦後の廃墟の中から経済大国へ急成長したのは立派ですが、その代償としてかなりの歪みやアンバランスを残したことも確かです。

資源破壊、環境汚染等の物質的歪みもさることながら人間疎外、道徳荒廃等の精神的な面もかなりの痛手を背負っていると思います。戦後一貫して同一方向に振り続けた振子を、量から質へ、物質から精神へ、経済から文化へ、逆方向にもどす必要があるのではないかと思います。「人間らしさを取りもどすこと」が余暇開発のねらいです。微力ながらそのための調査研究、コミュニティ開発、トリム（心と体のバランス）運動、文化交流等に励んでおります。

ORもこのような観点から新しい時代のORへと脱皮することを期待しています。

日本開発銀行
事務管理部 浅野美代子

私の所属している部では、銀行内のすべての事務の管

理と電算機業務を行っており、その内容は多岐にわたっている。以前は、東京大学奥野忠一教授のご指導のもとで、多変量解析手法を用いて財務データによる定量的企業評価などを行っていましたが、データを見ただけで（多変量解析をするまでもなく）状況が理解できる人々にとっては、あまり有効な情報とはならないし、コンピュータにかけて、何やらむずかしい計算をした結果などではどうも納得がいけないということで利用者はごく一部である。

OR関連では、最近LPを応用し、産業構造分析を行なった程度でなんの研究もしていませんが、OR学会はテーマが広く会員層も広いので興味深く入会させていただきました。今後はdecision analysisなどを、少しずつ勉強してゆきたいと思っています。

中央大学
理工学部管理工学科 野中 敏雄

私どもの科からも将来OR方面で大いに活躍する人も出ることを期待しているわけですが、学生たちが4年たってどんな考えをもつようになっているかは大変興味のあるところだ。それを知る1つの材料として、学生たちが自由に決める卒論のテーマと、そのとり組み方を見るのはまた興味のあることです。そこで、私の今年度の学生のテーマを書いてみましょう。

1. 決定理論と（全部共通なので以下では省略）そのマーケット問題への応用 2. 都市経済構造問題への応用 3. 駅前放置自転車問題への応用 4. 交通発生モデルの作成への応用 5. 交通事故分析への応用 6. 安全管理への応用 7. 金属材料解析への応用 8. コーヒーの官能検査への応用 9. タバコの嗜好調査への応用。

全体の方針としては、まず使う数学的理論をきちんと細かいところまで証明して理解する。そのうえで2、3人が組となって（全員21名）とりあつかいたい実際問題のテーマを決め問題にとりくんでいくことになっています。全員出発点は決定理論ですが問題を大きくつかむためにはORの考え方や手法が必要となってきます。

三菱電機
開発本部通信研究部 杉山 康夫

私は、1981年2月9日から12日まで、米国カリフォルニア州サンタモニカで開催されたIEEE主催の情報理論に関する国際シンポジウムに出席しました。参加国数は、24カ国、出席者数は、約300名（日本からは10名）、発表件数は、242件（日本からは共著を含め13件）でし

た。このシンポジウム特有の出席者～講演者という図式は、今回も変わっていませんでした。

セッションとしては、シャノン理論、多端子情報理論、確率過程、推定、検出理論、量子化通信路、符号化、暗号、コンプレキシティ、通信ネットワーク、通信システム、パターン認識、画像処理、音声圧縮、レーダーの5種類がありました。最終日の午前中まで、延べ35セッションが、5セッションずつ並列に開かれるという過密なスケジュールでした。さらに、その合い間をぬって、記講演1件、招待講演4件が開催されました。

一般的な印象としては、ネットワークへの志向、理論の精密化、理論の実用化が進展しているように見え、VLSIの出現に合わせて情報理論の必要性が増してきているように感じました。ORも、理論と実用との関連においては、情報理論と同様な立場にあると思われるので、今後、より複雑なシステムの理論体系の確立、理論の整備、理論の実際への適用等の要求がますます増えてくると期待されます。

日立製作所 システム開発研究所 宮崎 聡

入社して1年になりますが、まだ見習い期間中といったところです。現在は、プラントの安全性・信頼性解析を行なっています。

大学の時には、信頼性最適化問題に対して整数計画法からのアプローチを試みました。ヒューリスティックな手法と Surrogate Constraints を用いた手法の2つを研究しましたが、どちらもツメが甘く中途半端に終わったように思います。

今、関心をもっているのはシステム異常診断であり、伊理氏らの論文「システムの異常の原因探索問題への1つのグラフ理論的接近法」は大変参考になりました。

残念ながら、貴誌の熱心な読者ではありませんが、文献紹介、書評等の欄は貴重な情報源として活用させていただいています。内容のいっそうの充実とともに、量的にも増えることを期待します。

大阪府立大学 工学部経営工学科 西山 徳幸

私は当学会へ入会させていただいてから、約20年くらいになる。その間大変ご無沙汰してしまった。それというのは経営工学会、機械学会その他でどちらかというなら泥くさい研究を発表してきたからです。たとえば、作業測定におけるサンプル・サイズの決定問題や作業時間分布を考慮した組立生産システムの設計に関する研究な

ど。いちおう、なんとか区切りがついたと思うので、もう少し範囲を拡げてみたいと、また頭をやわらかくしたいとあれやこれやと思考をめぐらせている今日この頃です。幸いにして、つい先日わが大学でOR学会が開かれ久しぶりに参加する機会に恵まれた。あまり多くの発表を聞くことができなかったが、非常に参考になった発表もあり、これからまじめに学会に参加しようとも考えている。なお、共同研究者が全般的生産計画、多目標計画法さらにスケジューリングなどの研究を行なっているの、それらの勉強もやっている次第です。

青森大学 橋本新太郎

弘前大学を定年退官後、縁あって私立の青森大学のORの講義を担当することになった。

文科系の経営学部であり、数学が弱く、卒業後は中小企業へ就職である学校のカリキュラムは、経営学中心に必須専門と選択コース別になっている。ORは経営情報コースの4年生に4単位あるだけである。

私は近代経営学において、意思決定の手法としてのORを、経営学の基礎専門に4単位入れて、しかる後に経営情報コースにコンピュータの後のORを入れるカリキュラムに変更すべきことを主張している。それに文系の経営学におけるORの教育内容と教育方法について悩んでいる。よい知恵があればご教示願いたい。また同じ悩みがあれば共に語りたいと思っている。

(現在は、情報経営コース。4年生にOR 4単位のみ)

日本大学文理学部 応用数学科非常勤講師 米田 桂三

昨年3月に日本工業大学を定年(70歳)退職してからも上記を従来通りやっています。

講義内容は標本調査法と実験計画法と主としていましたが、今年からはこれらを縮小して多変量解析を大幅に入れることにしました。ただしこの演習の膨大な計算を学生に予定時間内に手際よくやらせる手続き計画を思案中です。四十余年の教職(専任)から退いても気になるのは教育方法に対してOR的研究をもっと利用できないのかということです。このことは気づいておられる方が多いかも知れません。相手は生き物ですから測定することさえ大変です。入試に関する議論が象徴的です。また人間相互の意図伝達や発想相違の理解が案外容易でないことを年齢とともに痛感するので、近時流行の日本人論をいろいろ乱読しています。私自身は日本人でも外人でもないことになりそうです。